

術後鎮痛剤の使用状況と評価

寺内美貴 野本依里 中松佳世子

【はじめに】当院は整形外科でも脊椎内視鏡手術に特化した病院である。術式や年齢で選択されたクリティカルパスが使われ、術後の鎮痛剤は手術翌日から7日間投与されているが、患者によっては鎮痛剤が変更になったり、他の鎮痛剤が追加になる場合がある。その現状を把握するため統計をとることを試みた。

【方法】平成25年10月～平成25年12月の3か月間、手術を受けた患者の術後鎮痛剤の使用状況を術式別に集計し評価することとした。術式はMED（内視鏡下椎間板摘出術）MEL（内視鏡下椎弓切除術）椎体間固定術の3種に絞り、初めから持参の鎮痛剤を使用する症例は除いた。

【結果】集計は1.5か月分であるが、パスのロルカム錠のみの服用で退院となった症例の割合は、MEDが84.5%、MELが76.3%、椎体間固定術が44.7%の結果であった。

【考察】パスの術後鎮痛剤にロルカム錠を使用しているのは、熱系への作用が他のNSAIDsと比較して小さいという理由からである。ロルカム錠のみで十分な鎮痛効果が得られない場合は、他の薬剤に変更したり、追加したりしている。MED、MELは低侵襲の手術で患者への負担が少ないので、術後の鎮痛が効果的に得られていると思われるが、椎体間固定術は術後の痛みが強くパスの鎮痛剤を変更したり、他の鎮痛剤を追加する場合が半分以上の症例でおこっている。

【まとめ】MED、MELの術式では術後鎮痛剤はロルカム錠で十分役割を果たしていると思われるが、今後変更や追加の症例が増加する場合は鎮痛剤の再検討も必要と思われる。